

第三部 再建の姿勢整う

第一章 「学鑑」再刊と社史発行

終戦以後、窮乏のどん底で、政治・経済・教育いずれの面でも、未曾有の変革を経験してきた我が国は、昭和二十六年を迎えた。そして漸く進路を規定された。

東京裁判の決定、追放の解除、対日講和条約の締結、進駐軍の撤退等がつづいた。結果として、GHQによる当初の過激な日本改革策は改廃されて、資本主義的民主国家への道を歩むこととなった。そのために、日本は共産圏諸国と英・米資本主義国との間にはさまり、国際的に困難な立場に置かれた。

しかし、我が国としては、まず経済的自立を達成することが最も緊急の問題であることは、万人均しく認めるところである。そのために、技術の革新と企業組織の合理化が不可欠のことであった。政府は早急に経済自立の策を立て、強引に之が実現をはかった。たまたま朝鮮戦争の終結で、民間企業の不振、失業者の増加等の苦境に立った

が、政策面での政府の配慮、企業の合同、ソビエト・中共両国との貿易取り極め等で、その不況を転回させる曙光を見出した。

他方、GHQの指示に基づく教育制度の改革は次第に進んで、昭和二十三年四月には新制高等学校が発足、またキリスト教系・女子系を中心に公・私立大学十三校の新設を見、昭和二十四年には既設の六年制大学(私立・国立)の新制大学への移行も了り、昭和二十八年には新制大学院も開かれた。同時に文科系・理工科系の研究所が、国立を初めとして企業内にも設置されるというように、学理・実務両面に互っての長い間の遅れを取り戻そうとの気運が盛んになっていた。すでに昭和二十五年七月には第一回渡米留学生三四〇余名が出発した。日本の著名な学者に対するアメリカ合衆国への招聘も始まり、米・英・仏との間に交換教授派遣も起っていた。そのなかでも特に理工系の学科・技術の発達において、世界最高の水準を示していたアメリカ合衆国への留学者が多かった。

このような気運は、当社のみならず、洋書取扱業者にとって、非常に幸いした。

一 「学 鑑」再 刊

当社の諸般の態勢も整い、社会も次第に落ち着きを取り戻してきたのを期に、社内に「学鑑」を再刊しようとの希望が強くなってきた。いうまでもなく「学鑑」を再刊せよとの声は、戦後間もない頃から、当社を知る多くの方方から、しきりと寄せられていた。しかし、それを実現するには、洋書の輸入が恒常化することが第一要件であったが、この頃になると漸くその機運が熟して来た。そこで、昭和二十四年に入ると、このことを社内決定し、同年

秋から学鑑編集部を設け、田中辰治郎を部長として、諸般の準備を進めた。

創刊時の「まなび学ともしびのともしび燈」が「学燈」となり、ついで「学鑑」となって戦争中の休刊時に至ったので、復刊に当たっては「学燈」という文字を使うつもりであったが、終戦後間もなく、保坂弘司が、学燈社を起し「学燈」という受験雑誌を既に発行していたため、使用することが困難となった。そこで、当社は戦前使用した「学鑑」を表題として、昭和二十六年一月復刊第一号を創刊した（「学鑑」が「学燈」と同じ意味をもつことについては本書四九五頁の木村毅の説明を参照）。昭和十八年十二月に休刊してから丁度七年であった。

復刊の言葉の中で、

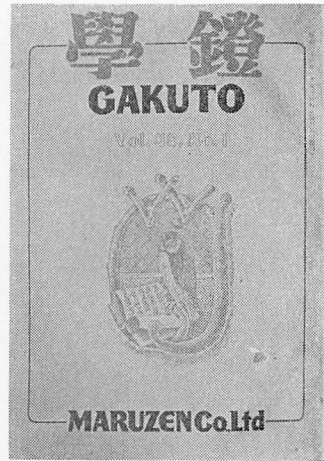
休刊既に七星霜、われわれは百年とも感じられる永い空白時であった。今日ここにわれわれは再び使命の灯を点じ得るに至る。たとえ光度は螢火の程度であっても、やがては煌々たる灯として、文運復興、延いては将来進歩の一翼となりたい念願である。

戦火に焼け落ちた国土は、慥かに一応の復興を見たが、未だ物的復興の域を脱しないと見られる。われわれの目指す彼岸は実に精神面の復興にある。即ちわれわれの遇う試練はこれからである。

「学鑑」は、この試練の荒波にただよう船舟に燈台としての役目を果たしたい。然しこの大切な役務は大方江湖の高底を受けてこそ達成されるものと信ずる。

冀くば従前の如く厚き御支援を懇願する次第である。

と、述べている。



「学鑑」復刊第一号

ところで「学鑑」は単なる内外新刊書の紹介を以て満足してきただけではなかった。目的とするところは、専門の学者、研究家、事業家、大学生、年少学生に対し、更に外国語に関心の少ない人にも「学鑑」を通じて外国文化への興味を起して貰うことに少しでも役立つことを期した。いかえれば「学鑑」を万人向きの知的総合啓蒙雑誌たらしめようと念願したのである。

復刊第一号（通巻第四十八巻第一号）の寄稿者は、中井正一、木村毅、戸定隠士（徳川武定）、魚返善雄、成田潔英、福原麟太郎、西脇順三郎、梶木隆一、執行岩根、荒木綱男、栃内吉彦、白井俊明の諸氏であった。

当時、国立国会図書館副館長であった中井正一は、「新時代の世界のいぶきをつたへるものであれ」と望み、東西文化の交流に努力し、その史的研究に幅広い独特の成果をあげている木村毅は、由緒ある丸善第一号の原稿用紙の作製、名著・稀覯本の復刻、日本文学の欧米訳を集めた展覧会の開催を提唱している。また我が国における造船技術の大家徳川武定は、白楽天の坐右銘「千里始足下、高山起微塵。吾道亦如此。行之貴日新」を惹いて「本来の学鑑の品格を保ちつゝ百尺竿頭更に一步を進める」こと、「新奇を求めて気障に墮することなく、然も世界の文化と後れざること期し、且つ常に書物の内容に生命を感じる真摯な学究者の為めの好伴侶となる事を心掛けよ」と忠告している。また当時、王子にあった製紙記念館館長成田潔英は手漉紙による高価特定本の出版を望んでいる。

この前年にバーナード・ショウ (Bernard Shaw, 1856-1950) が長逝していたので、福原麟太郎、西脇順三郎、梶木隆一の三氏には、ショウに就いての回想記を依頼し寄稿を得た。そして、当時取り寄せ可能なショウ関係の書名を掲げて、更めて新しいショウ研究家への案内とした。

「学鑑」の復刊は、当社を知っている凡ゆる層の方々から洋書の窓として歓迎された。そして第二号以下においても各界の先覚・新進から励ましや注文の文を戴いた。

京都の寿岳文章からは「丸善京都店」と題した、中学初級時代から、この時に至るまでを追懐した珠玉の文章の寄稿を得た。

明治政府の方針に禍されて、とかく中央集権的になりやすかった日本の文化を、少くとも西洋文化との交流面に於いて国内全般の関心事としてくれた功労は、けだし丸善の大いに誇ってよい輝かしい歴史的事実なのである。

京大の法科に進んだ私の昔の一友人は、将来丸善の独占的企業を粉砕するために俺は勉強するといきまいてゐたが、よし実体は何であらうと、私は昔も今も、丸善を一個営利の店舗とは考へてゐないし、また考へたくない。「学鑑」昭和二十六年十月号)

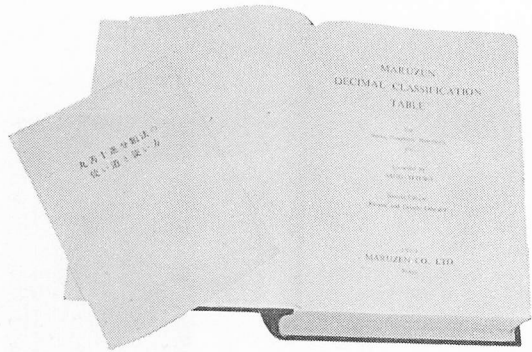
当社としては、まことに肝に銘じて服膺して行きたい忠告である。

復刊当時の担当者の語るところによれば復刊当初から月々一万部を印刷していたという。

二 丸善十進分類法の採用

「マルゼンアナウンスメント」や「学鑑」で用いられた戦前の輸入洋書のまとまった分類表は、残っていないために、既述のように第三編執筆者中西敬二郎は、当時の「学鑑」や「マルゼンアナウンスメント」を追って、分類表を復元する労をとった。それは最初はアルファベット順であったが、大正十年以後は現在の十進分類法に近いものとなった。(分類の基本原則は既記のように Sonnenschein 社の “The Best Books” の分類法によった。)

終戦後、CIE 図書館に通い目録作成をしていた過程で、従来の当社の分類法を改める必要を認めたが、戦後昭和二十四・五年まではこの分類法に拠っていた。洋書の輸入再開が実現し、輸入量が多くなり、なかでも米国書が過半を占め、また一方日本の図書館界が概ね日本十進分類法を採用、しかも Dewey の十進分類法と共通させるという状態であったので、当社としても Dewey の十進分類法に近い分類法に変更する方が便利と考えざるを得なくなった。そこで、改めて分類法の変更を決し、その際、飽くまでも洋書販売店の特性を考慮した新しい分類法を編成することとし、当時、外国部嘱託であった斎藤哲郎を新しい分類法作成者に選んだ。斎藤は、懸命にこの仕事に取り組んで、昭和二十八年、“Maruzen Decimal Classification Table” を完成、抄略表一冊を印刷発表した。内容は大項目としては以下の十項目 ‘General Works, Philosophy, History, Social Sciences, Natural Sciences, Engineering, Manufactures, Agriculture, Fine Arts, Linguistics, Literature’ を定めた。そしてこの各大項目



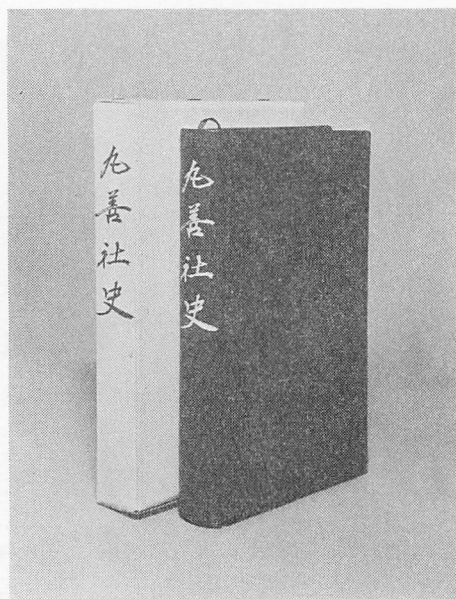
“Maruzen Decimal Classification Table”

の各々をそれぞれ十中項目に分ち、各中項目をそれぞれ十小項目に分け、合計一、〇〇〇小項目にした。しかし、これは営業用であって、齋藤は更に一、〇〇〇項目の展開法を定めて、完全な“Maruzen Decimal Classification Table”を昭和三十年に作成、翌年印刷公表した。五九三頁の大冊である。そこには Dewey や日本十進分類表を主なる参考としながら、当社が多年の経験から見て便利と考えた分類を加味していることを断っている。

この分類法は、改善すべき点が多かったので、齋藤は、更に補正に力をそそぎ、昭和三十五年改訂増補した“Maruzen Decimal Classification Table. 2nd Edition”を発表した。この版では、初版にはなかった Subject Index を附した。B五判の大冊であった。インデックスを附することによって、当社洋書取り扱いの能率は可成りに増進することが出来た。

三 「丸善社史」発行

「学燈」の復刊と共に忘れてならないのは、昭和二十六年九月に「丸善社史」を出版したことである。この事業の経過については、同書に詳しいし、また本書においても記述があるのでここには触れない。



「丸善社史」



猪鹿倉徹郎



徳川武定
「丸善社史」編纂者



幸田成友

社史が出来上がると、当社は、これまでいろいろ指導、御愛顧をうけた諸氏を初め、関係各方面へ贈呈した。幸いに、各方面から賛辞をいただき、面目をほどこした次第であった。

寄せられた感想によって、当社が過去八十年に亘って外国文化の紹介に尽した功を認めていただけただけことは、何にもかえがたい光榮と今日でも感謝している。朝日新聞は「天声人語」欄で、丸善は「洋書の輸入によって西歐文明を日本に吸収する文化的役目を果しながら、商売としても四分の三世紀にわたって繁盛してきたところに意義がある。福沢諭吉門下の早矢仕有的（ハヤシユウテキ）が初代社長となり、福沢ブレン・トラストの偉才たちが後押しをして、いわゆる士魂商才ながら士族の商法に墮せず、早くから西洋帳合の法（簿記）や株式組織をとり入れて近代的経営の草分となっている。」と近代的経営法採用に好意を示した。このことが、やがて当社をして事務用品の改革から洋服の採用にまで向わせたことにもなったと考えるのである。そして最後に「丸屋商社之記」の「損失アル時ノ心得」の「商人は一旦の利に誇ることもなく一旦の損に驚くことなかれ、たゞ恐れ慎しむべきは、日々月々軽々の損で、一旦の損は連綿軽々の利を以て救ふべけれども連綿軽々の損は一時の利を以て補い難し」を引いて、「なんと戦後派の商人などには薬になる金言ではあるまいか」と結んでいる。

現在当社社員たるもの、また心に銘じて社業に励みたいと思う。